



文=伊達なつめ(フリーライター)

2月上旬、蜷川が参加する稽古としては2日目になる日のこと。大練習室のドアを開けると、長方形に並べられたテーブルを囲んで、43名の劇団員がズラッと顔を揃えて、蜷川らスタッフと向き合っていた。4人ずつ名前が呼ばれ、役が割り当てられると、みんなの前で戯曲の冒頭10ページほどを読んでみる——という作業が、メンバーを入れ替えながら数回繰り返される。どうやらこれは、稽古場公演の配役を決める、オーディションを兼ねた本読みらしい。

「まずは全員に機会を与えて、公平を期す。演劇的な理由でキャストティングしている、ということを示すためにね」

と蜷川。とはいえ、ゴールド・シアターの目的は、単なるブロの俳優を育成することにはない。なるべくみんなに出番がま



わるのが肝要なわけで、今回の『思い出の日本一万年』も、その点を考慮して選ばれた戯曲といえる。

死んだ男サ
ブローの父と

2人の息子が、サブローの最期を知る恋人・花子に逢いにやって来る。4人の不毛な会話が續くなか、それを遮るように何人もの人間が入り乱れ、やがて各自が、自分の思い出を語り始める……。'06年の第2回稽古場公演『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』などと同様、若かりし日の蜷川がコンビを組んでいた清水邦夫の初期戯曲('70年初演)。「70年安保闘争時代を色濃く反映して、内容はかなりアナーキーだ。

清水戯曲を壊して、 個人史を映し込むことから

「そう読もうと思えば読めるメタファーがたくさん詰まった本ではある。でも、今回は政治的なものにはしたくない。ある思い出を核にして集まってきた人々ではあるけれど、それぞれの思い出は多層的で、人によって持つ意味が違う——という清水のこの戯曲の構造を使って、みなさん自身の物語＝自己史を語ってほしい。それがメインです。今われわれが抱えている思い出の軌跡を表現することで、この舞台空間が共感され、普遍性が出て豊かなものになればいいなと思っています」

ひと通り本読みが終わると、蜷川は全員に向けて、そう上演意図を説明した。もともとこの戯曲は、既成の演劇の枠組みを壊すことを目指して書かれ、初演の舞台には職業俳優ではない人々が多

く参加して、自身について語るくだけがあった。今回はその部分に、ゴールド・シアターの面々ならでの、豊かな個人史をフィーチャーしようというわけだ。劇団員は、個人史についての作文の提出を義務付けられ(た

だし内容は事実でもフィクションでもOK)、それが上演台本に取り込まれて、各自が舞台でその個人史を語るという趣向。作家が書いたせりふの



一言一句を大事にするタイプの演出家である蜷川にとって、これは戯曲を壊す初めての経験となるそうだ。若者だったら不安なところだけれど、ゴールド・シアターの俳優たちの自己史だったら、おもしろくないわけがない。初々しさと太々しさが同居したこの劇団ならではの持ち味を、また堪能できる日の来るのが待ち遠しい。

●●●●PLAY●●●●

さいたまゴールド・シアター “Pro-cess 3” 思い出の日本一万年

【日時】3月27日(木) 開演 19:00 28日(金) 開演 19:00
29日(土) 開演 13:00 / 18:00
30日(日) 開演 13:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大稽古場

【作】清水邦夫 【演出】蜷川幸雄 【出演】さいたまゴールド・シアター
【チケット(税込)】好評発売中 全席自由 1,500円

第2回本公演が6月に決定!!

昨年の第一回本公演『船上のピクニック』から1年を経て、臨む本公演には大きな期待がかかる。詳細は次号にて。